

英米文学科同窓会 公開講座

アメリカ小説はいかに翻訳されてきたのか —『風と共に去りぬ』、ハードボイルド文学から 村上訳フィッツジェラルドまで

講師 井上 健氏（東京大学名誉教授）



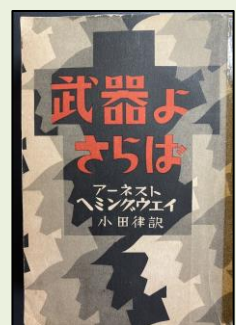
東京生まれ。東京大学文学部英語英米文学科卒業、同大学院比較文学比較文化専攻修了。研究分野は、比較文学比較文化、アメリカ文学、および翻訳論。神戸大学助教授、京都大学助教授を経て、東京工業大学教授、東京大学教授、日本大学教授。日本比較文学会元会長、日本ポー学会顧問。

著書に『文豪の翻訳力——近現代日本の作家翻訳 谷崎潤一郎から村上春樹まで』（2011）、編著に『翻訳文学の視界——近現代日本文化の変容と翻訳』（2012）、『比較文学比較文化ハンドブック』（2024）などが、訳書にカーツワイル『ポスト・ヒューマン誕生——コンピュータが人類の知性を超えるとき』（2007）、ヘンリー・ミラー『セックス』（2010）などがある。

明治日本において、文明開化のモデルたるアメリカの文学は、フランクリン『自伝』やホイットマンのように、デモクラシーやヒューマニズムなどの理念・理想と結びつけた読まれ方をされるのが常でした。しかし、昭和に入ると、シネマ、ジャズに代表されるアメリカ大衆文化が日本人を魅了してやまぬ一方で、ベルヌ条約（著作権の国際的保護を定めた）未加盟のアメリカのベストセラー小説が、版權取得が不要なゆえ、速やかに翻訳紹介されていきます。ヘミングウェイ『武器よさらば』（1929）の邦訳刊行は、何と原著刊行翌年の1930年なのです。ミッチェル『風と共に去りぬ』（1936）、パール・バック『大地』三部作（1931～35）の邦訳は、大衆文学と言え、時代小説か探偵小説しか知らぬ日本の読者に、歴史や時代をしかと踏まえた、スケール豊かな物語の魅力を伝えました。

ヘミングウェイ短篇が、ハメット（そしてチャンドラー）の探偵小説が先鞭をつけた「ハードボイルド」文学が次々に翻訳されたのは、1950年代に入ってからのことです。余分な修飾語句を削ぎ落した短文を畳みかけていくハードボイルド・スタイルは、タフな男性性のステレオタイプを定着させるとともに、その訳文体を通じて、新たな日本語の文章作法を生成していきました。同じく1950年代に『危険な年齢』という邦題で初訳された、サリンジャー『ライ麦畑でつかまえて』（1951）は、若者言葉を駆使した饒舌な一人称語りという新たな文体・表現を日本文学にもたらします。村上春樹がこの作品を再翻訳するのは、今世紀の初頭のことです。

1930年代から、80年代の村上春樹訳フィッツジェラルドに至る、日本におけるアメリカ小説翻訳紹介の半世紀の歴史をたどり、翻訳されたアメリカ文学のもたらしたものを、翻訳研究、比較文学、出版史などの観点から考察してみたいと思います。（講師）



日時：2025年9月23日（火・祝）13:00～14:30

会場：17306 教室（17号館3階）

参加費：500 イーゴ pay（事前申込不要）

問合せ先：英米文学科同窓会

E-mail：aogaku.eibun.alumni2020@gmail.com

FAX：03-3409-8975（同窓祭事務局内）



同窓祭ホームページ



英米文学科同窓会
ホームページ